

山本幸男著

『正倉院文書と造寺司官人』

山下有美

本書は、著者がこれまで取り組んできた天平宝字期の正倉院文書の精緻な分析と考察による論文を集めたものである。『写經所文書の基礎的研究』（吉川弘文館、二〇〇二年刊行、以下前著と呼ぶ）とは緊密な関係にあり、論文の執筆時期も重なっている。

正倉院文書（写經所文書）には時期に

章）にも一目瞭然にわかる表を掲載している。著者は、その時期のその事業の事務局に存在した通りに、帳簿や一枚物の文書あるいはメモ、その場すでに反故となつたものなどをすべて網羅するので、史料の漏れ落ちがない。私はこのような著者の仕事を天平宝字二年（七五八）の史料で実際になぞつたことがあるが、煩雜の域を超える根気とのたたかいを経験した。前著・本書とも著者の忍耐力と史料の正確な読解力なしには生まれなかつたと最初に言つておきたい。

さて、本書の構成は I 「安都雄足」、II 「写經所をめぐる人々」、III 「下道主と上馬養」であるが、これは便宜上の分類と思われる。全体として、正倉院文書でなければ二年刊行、以下前著と呼ぶ）とは緊密な関係にあり、論文の執筆時期も重なつてい人間像・人間関係を豊かに描いた論集といえる。

I の第一・二章は一九八五・八六年と著者の正倉院文書研究のなかでも古く、著者の動きに注目してきた。天平宝字期の文書選び、著者独自の史料整理（表裏関係・復原）を行い、前著・本書（第六・八の社会）岩波書店、一九八三年所収）で安

都雄足の私経済（私富と私的経済活動）が官司財政のなかで生き生きと機能していると主張したことへの反論として書かれたものであった。第一章「造東大寺司主典安都雄足の「私経済」では、吉田氏が私経済として着眼した「雄足の宅」における木材の購入と米の借貸について、史料に即して実態を明らかにし、事実は雄足の職掌・権限に依拠して行われた経済活動であり、「私経済」を過大評価すべきでないと吉田説を批判した。一方で雄足と藤原仲麻呂との密な繋がりが雄足の「私経済」に影響し、雄足は最終的に仲麻呂家の家産組織に組み込まれ、七年ぶりに再開した仲麻呂家の一切経写經事業に参加した可能性を指摘した。この点は、正倉院文書から知られる雄足の半生を思いおこせば、卓見であると私は評価したい。

第二章「天平宝字二年造東大寺司写經所の財政運用」では、吉田氏が写經所の雄足の頻繁な貸借関係がわかる史料として参考程度にあげた「米・雜物等請充并借錢帳」（続々修四十三ノ七、十四ノ四七、五二）などを、他史料との照合を通じて見事に解説し、一四〇〇巻写經事業の遺錢、知識経

で集まつた錢の運用状況を明らかにした。

前著の宝字二年写経事業研究と一体的な成果でもある。ただ、著者は雄足の保有する錢を、造東大寺司から請けた公錢であつて私錢ではないとするが、雄足が私錢をもつて立て替え、後で返納したという単純な事実なのではないか。そうした「私経済」も適宜運用して、写経所の財政としては赤字にならないようになることが、造寺司の官人に求められた才覚だと私は考える。

IIの第三章「市原王と写経所」は、市原王が「長官王（宮）」と呼ばれる由縁を時期ごとに詳細に検討し、左大舎人頭や玄蕃頭であるがゆえにそう呼ばれていたことを証明した。造東大寺司の初期は長官不在であることこれがこれで明白になった。次の第四章「正倉院文書に見る「鳥の絵」と「封」」は、前著の宝字二年の写経事業研究に基づき、案主の一人であった佐伯里足が仲麻呂に召され、急遽案主を交替する際、担当帳簿を閉じるのに自らの署名を図案化した鳥の絵を印としてつけていたこと、「封里足」と員数の上に必ず書く行為についてはほかの事例にもあたり、料物の出納のたびに実際に櫃に紙で封をするという具体的な管理方法を推定した。統計的分析によれば、この封の性質が変化したという私見とも合致する。なお、阿刀乙万呂が帳簿を記帳しても案主と称されないのは、彼が未選舍人だったからと私はとらえている。

さてIIIの第六章「造石山寺所の帳簿」は、これまでにはなかつた手法を用いた研究である。それは、帳簿や文書を作成する案主の筆蹟から筆者を確定するという方法である。序章で述べているように、写真の入念な観察によつて筆蹟の判別は可能であるが、その客観的な提示方法がむずかしい。著者は、比較の対象とする文字を選び、写真からの取り取りによって食物用帳の日ごとの判定結果をまず示し、同様の方法で造

石山寺所のすべての帳簿の日ごとの筆者を確定して図示し、時期ごとの変化を追つた。三月上旬に事務局の補佐に阿刀乙万呂が加わり、旧帳から新帳への書き換えが行なわれる点には、この頃から石山寺造営機構の性質が変化したという私見とも合致する。なお、阿刀乙万呂が帳簿を記帳しても案主と称されないのは、彼が未選舍人だったからと私はとらえている。

第七章「造石山寺所の帳簿に使用された反故文書」では、第六章の調査をもとに、誰がいつ、どのような反故紙を用いたかをすべて図示し、反故紙が造石山寺所にもたらされる機会・経路を考察したものである。細部には異論もあるが、最も違和感を覚えるのは、道守や吉成が雄足の側近である（初めに側近と推定したのは前掲吉田論文）という点である。道守や吉成については決定的な証拠が得られないで私もなかなか公表できずにいるが、前者は上馬養、後者は下道主本人と考えるべきであり、本名とは違う名前の存在やその使い方の問題として、写経所文書全体で調査すれば必ず成果を得られるとしている。付論2「反故にされた万葉仮名文書」は、『大日本古

文書』未収なのであまり知られていない二種の文書を紹介している。なお 奥村悦三

（やました・ゆみ 日本古代史研究者）

『古代日本語をよむ』（和泉書院、二〇一七（A5判、五二六ページ、一一八八〇円、法藏館、二〇一八・六刊）

田や米の運搬などに関する内容であることがわかり、学際的な共同研究によつて解説が進むことを願いたい。

第八章「奉写御執経所・奉写一切経司関係文書の検討」は宝字六年（神護景雲三年

（七六九）の七年間にわたる経巻奉請文書を三巻の繙文として復原し、経巻の奉請事務のあり方を考察したものである。宝字八年までは写経事業も部分的に行われていた。だが経巻の奉請事務を、仮称「経蔵」

が一貫して管理し、それが北倉代の管理下に置かれていたという説を示した。私見とは若干異なるものの、写経所文書伝来の契機に「二重構造を想定している点で最も興味深く読んだ。

正倉院文書研究の精緻化が進み、日本古代史研究者のなかでも特別視されている傾向は確かにあるだろう。しかし、正倉院文書から知り得た事実をきちんと提示することで、他分野の研究者の目にとまり、相互の研究の進展を促すと信じ、本書をぜひ読

いて、「内閣寄り」という批判が会派から

であるなど、選出を家達が「院議」に従つて「公平」に行つたといえるのか疑問視される例がみえる。特別委員選任に「院議」が存在するかは微妙かもしれないが、「院議」

の元になる会派の意向を無視して選出する、いいかえれば、「院議」の形成過程へ介入する議長の行動は、院議尊重が「公平」であるという意味では「公平」とはないだろ。

また、本書の扱う対象は史料が乏しい分野もあるのは確かだが、傍証でもよいので、史料的裏づけを持つた論証が欲しい部分があつた。たとえば、第二章第三節で著者は、近衛の斡旋活動が桂園体制的な「議場外における協議による妥結」という政治文化であり、その前提となつたのが会期の短さである、としている。しかし、近衛の行動が会期の短さから直接的、間接的にでも説明できる史料は提示されていない。

このような概念の一貫性、史料実証面での不安は本書の価値を大きく損なう可能性があるだけに、今後の研究でカバーして欲しいところである。それにより本書の持つ意義や価値が十全に發揮されることを期待

したい。

(いまづ・としあき 亞細亞大学法学部准教授)
(A5判、二〇二ページ、四三二一〇円、吉田書店、二〇一八・一〇刊)

京都の立命館大学大学院の日本史学専攻博士課程に籍を置いた。本書は、二〇〇八年に立命館大学において桂島宣弘氏の指導で提出した博士論文をもとに、その後は磯前順一氏からの出版の勧めと対話により、今回の出版に至つたものである。

本書に通底するキーワードは、「文明」「慈善」「宗教概念」「親日」「抗日」「帝国史」「植民地的近代」である。(三二九頁)。主な研究が盛んになつてきたが、このたび韓国人研究者の手により、新たな局面が切り開かれた。

本誌の読者で、仏教史に関心を持つ方は多いだろう。ほとんどは、古代から近世にかけての分野ではなかろうか。そもそも仏教は、六世紀に朝鮮半島を経由して日本に公伝した。そして二一世紀。近代の仏教研究が盛んになつてきたが、このたび韓国人研究者の手により、新たな局面が切り開かれた。

著者の諸点淑(ジエ・ジョムスク)氏は、韓国釜山にある東西大学校東アジア学科の副教授である。彼女は、同大の日語日本文

学科、日本地域研究科の修士課程を学び、

『植民地近代』という経験 植民地朝鮮と日本近代仏教』

大澤広嗣

諸点淑著

序章

第一節 問題の所在

第二節 近代「日本仏教」から韓国の近代史を読む

1 近代「日本仏教」のとらえ方

2 「帝国史」的な観点から近代の「日本仏教」をとらえなおす

3 研究の方法

第三節 先行研究

1 日本「近代仏教」に関する研究

2 東アジアにおける日本仏教の布現況

谷派と浄土宗が行つた社会事業について歴

史的経過を踏まえて、近代の「日本仏教」をめぐる概念と言説の分析を行つてゐる。

韓日両国の歴史認識の相違があるなか、

本書の視点は、国境を越えたトランスナショナルを目指した帝国史からの日本仏教の叙述にある。著者が言う帝国史の觀点とは、「一国史的な觀点から離れ、宗主国あるいは植民地という境界の概念を有していない全体を指す」(一〇頁)という。韓国

の歴史認識でみられる親日—抗日の枠組みから離れて、広い範囲から帝国—植民地の関係について追及することを目指している。

日本の仏教宗派のうち、本書では真宗大

谷派と浄土宗の二派を取り上げた。一九三九年の宗教团体法制定まで一三宗五六派があつたが、選出の理由は次のとおりである。前者は、一八七六年の日朝修好条規締結を経て、「開港直後の一八七七年にいち早く朝鮮布教を開始」(一七頁)し、後者では「日清戦争以後の浄土宗の社会事業活動は、主に朝鮮人を対象に実施」(同頁)したからである。一派を取り上げること

で、植民地朝鮮における日本仏教のおおま

本書の展開は、先行研究を丁寧にたどり、議論の前提として日本内地での真宗大谷派および浄土宗の社会事業を紹介する。

そのうえで、植民地朝鮮におけるは真宗大谷派を中心に

1 向上会館の設立背景

本書の展開は、先行研究を丁寧にたどり、議論の前提として日本内地での真宗大谷派および浄土宗の社会事業を紹介する。

そのうえで、植民地朝鮮におけるは真宗大

谷派を中心に

教
3 朝鮮における日本仏教の布教
第一章 日本仏教の社会事業の展開
第一節 「日本型社会事業」の誕生
第二節 真宗大谷派の社会事業の展開
——「大谷派慈善協会」を中心
に
第三節 浄土宗の社会事業の展開——
「淨土宗勞働共濟会」を中心
に
第二章 植民地朝鮮における真宗大谷派
の社会事業
第一節 真宗大谷派の朝鮮布教
教事情
2 真宗大谷派の朝鮮布教
第二節 真宗大谷派の初期社会事業
1 日本人居留民の登場
各地域における日本人居留民対
象の社会事業
3 各地域における朝鮮人対象の社
会事業
第三節 植民地朝鮮における真宗大
谷派の社会事業——「向上会館」
を中心

本書の展開は、先行研究を丁寧にたどり、議論の前提として日本内地での真宗大谷派および浄土宗の社会事業を紹介する。

そのうえで、植民地朝鮮におけるは真宗大

かな動向が把握できると説明する。

分析の事例として、本書では植民地朝鮮における日本仏教の「布教活動」ではなく、「社会事業」を取り上げている。特には、真宗大谷派の向上会館と浄土宗の和光教園である。これらの組織では、子供から大人までを対象に、初等教育、教化活動、技能実習、職業斡旋、宿泊所の提供、衛生観念の普及、都市貧困層の移住促進など幅広い事業を行った。日本仏教は近代化により、檀信徒以外の不特定多数に対する公益活動を進めたが、「慈善事業」、「感化救済事業」などを経て、「社会事業」として位置づけされた。社会事業は、「宗教の近代的実践」（一六頁）であるため、植民地空間では支配と被支配をめぐり、朝鮮民族に対する教化に暴力性が伴っていたという。朝鮮民族に対する福利向上とはいえ、結局は宗王国の日本に利する事業に変容したのであつた。

著者は、従来の近代日本仏教の研究は、西洋と東洋（日本）の関係のみ注目していると指摘する。しかし日本仏教は、西洋に会う時は苦しい「東洋」で現れ、日本以外の東洋（植民地）と出会う時は西洋の姿を

した別の「東洋」いう、二つの近代を使い分けているという。韓国と日本の近代史研究の成果と歴史認識の差異を知る著者であるからこそ、本書の意義は大きい。結びで、「我々は、ポストコロニアルの状況下にある現在の日韓における様々な問題群に、正面から立ち向かわなければならないだろう」（三三七頁）と述べる。これは、韓日

の言論空間への呼び掛けである。

最後に、評者にとって気になる点があ

る。朝鮮半島には、各宗派に先行して真宗

大谷派が進出した。本書では、近代に着目したが、もし近世からの移行に起きた幕末

維新もみていれば、同派が朝鮮半島へ進出

した動機が、より鮮明になつていてある

う。江戸時代まで東本願寺（真宗大谷派）

は、徳川幕府と関係が深かった。明治以降

は新政府を動かす長州閥と結びついた西本

願寺（浄土真宗本願寺派）に対して遅れを

みた。東本願寺は、積極的に政府へ協力を

べく、アイヌ民族が先住した北海道の開拓

を手掛け、朝鮮半島など外地進出に突き進

んだのではないか。

とはいえ、本書は近代仏教の研究進展に

刺激を与えた。韓日の文献を縦横に使い、

郷 燦著

『「盧溝橋事件記念日」をめぐる 日本と中国 政治的語りに見る日中戦争像の比較研究』

小 菅 信 子

（おおさわ・こうじ 文化庁宗務課専門職）
(A5判、三五二ページ、八一〇〇円、法藏館、
二〇一八・六刊)

した別の「東洋」の観点から日本仏教の近代性を浮かび上がらせた。本誌読者で、仏教に関心を持つあらゆる方に一読を勧めたい。韓国人研究者の視点で描かれた、今までみえないかった近代日本の仏教像が、ここにはあるからだ。

帝国史の観点から日本仏教の近代性を浮かび上がらせた。本誌読者で、仏教に関心を持つあらゆる方に一読を勧めたい。韓国人研究者の視点で描かれた、今までみえないかった近代日本の仏教像が、ここにはあるからだ。

における歴史認識や記憶が日本の敗戦を挟んでいかに連続してきたか、あるいは非連続であつたかについて論じている。

盧溝橋事件記念日にかんする中国の認識や記憶のありかたを、汪精衛政権・国民党政権（重慶政府）・中國共産党政権に三分類して、それぞれの政権がどのようなナラティブを用いて誰・何に対し影響を及ぼすとしたのかを明らかにする。さらに著者は、「戦時に形成された戦争認識が、戦後に戦争認識の基礎となり、大きな影響を与えていた」（九頁）と指摘する。以下、本書の章立てに即して内容を紹介する。

第一章「聖戦の語り」では、日本本土における「志那事變周年記念」がどのように展開され、日本から日本国民に強いられた「聖戦」の語りがどのように国民的な戦争認識を形成していくかについて論じられている。

日中戦争開戦後、英米に宣戦布告する日本においては、次第に「聖戦」の語りは変容していく。同時に日本の戦争認識から対中戦争イメージが後景へと追いやられている。

第二章「平和の語り」では、いかに注精

衛政権が対日協力の文脈で盧溝橋事件記念日を解釈し、占領下の民衆に語ろうとしていたかが叙述されている。それは日本本土の「聖戦」の語りと呼応するものであつた。

「聖戦の語り」は日本軍の占領地域において一定の影響力を持った。それを外形的に包括しようとするのが汪政権の「平和の語り」である。日本との平和共存を目指し国家を建設しようとする汪政権は、占領地で反感を買わぬよう慎重に配慮する必要があつた。そのため盧溝橋事件記念日が祝祭語りであった。そのため盧溝橋事件記念日は抗日戦線は、常に日本の語りといかに寄り添うかが権力側の念頭にあつた。これに対して重慶政府は國際社会へのアピールを常に考慮していた。すなわち盧溝橋事件は日本軍の謀略であることが、当時のヨーロッパ戦線の趨勢に応じて強調されたのである。「建国の語り」においては、日本はあくまで正義に悖る侵略者であり報復すべき敵であった。かくして盧溝橋事件記念日は抗日戦線を戦い抜くための献金運動、軍隊慰労、戦没・出征將兵家族慰問のための主要な活動日ともなつた。重慶政府は交戦建国を指導できる唯一の政府でなくしてはならなかつたのである。

第三章「建国の語り」は重慶政府についてである。国民党はみずからを正統的な「交戦権」者と位置づけようとした。著者はふんだんに一次史料を用いて、国統区

共産党がいかに当初は抗日民族統一戦線を遂行したかを強調し、のちには自らの政治理念を軸にいかに集約していくかが述べられている。

第四章「革命の語り」においては、中国共产党がいかに当初は抗日民族統一戦線を遂行したかを強調し、のちには自らの政治理念を軸にいかに集約していくかが述べられている。

第五章「革命の語り」においては、中国共产党がいかに当初は抗日民族統一戦線を遂行したかを強調し、のちには自らの政治理念を軸にいかに集約していくかが述べられている。